

# 國學院大學学術情報リポジトリ

〔報告〕 基盤教育の改革と東洋大学スタンダード：  
講演録平成28年度教育開発シンポジウム学士課程教育  
における共通教育：次なるステージへ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神田, 雄一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00002126">https://doi.org/10.57529/00002126</a>

## 第2部 《報告2》

### 基盤教育の改革と東洋大学スタンダード

神田 雄一氏（東洋大学副学長）

（中山）佐々木先生、どうもありがとうございます。

続きまして、東洋大学副学長、教務部長、理工学部教授の神田雄一先生から「基盤教育の改革と東洋大学スタンダード」と題するご報告をいただきます。

それでは、神田先生、よろしく願いいたします。（拍手）

（神田）皆様、こんにちは。ご紹介いただきました東洋大学の神田でございます。今日は國學院大學のシンポジウム、非常に時宜を得た、重要な教育のシンポジウム、こういうところで私どもの今やっております共通教育科目についてお話しできるのを大変楽しみにして参ったところでございます。

それでは、本学の教育に関する概要について少しお話しさせていただきたいと思えます。東洋大学でございますが、明治20年、哲学者の井上円了という人がいわゆる学祖でございます。今年で創立130周年を迎えております。学生数も今3万を超すというような、非常に大きな総合大学になってきたわけでございます。来年度からは新しい学部もつくるということでございます。

そういう中で、私どもの教育理念でございますが、これはやはり先ほども立教大学の先生、それから山田先生からのお話にもございましたように、特に私立大学におきましては、教育理念、教育目標は、カリキュラムを考える上でも、教育方針を立てる上でも、非常に重要なベースとなるものでございますから、若干ご紹介させていただきます。

先ほど学祖は井上円了、哲学者と申しました。そういう意味では、「諸学の基礎は哲学にあり」という大きな理念、それから「独立自活」、あるいは「知徳兼全」という言葉であらわしている教育理念がございますが、学生諸君には、ある種砕いた形で紹介しております。それぞれによって「自分の哲学を持つ」とか、あるいは「本質に迫って深く考える」、あるいは「主体的に社会の課題に取り組む」というような形で、具体的に示しているわけでございます。

さらに、先ほど今年度、130周年を迎えるとお話し申し上げましたが、実は125年の周年行事をやりまして、そのときに、私ども東洋大学といたしましては、新たな3つの柱を立てて教育というものを考えていこうではないかという議論をいたしました。

1つは、やはり本学のベースとなっております「哲学教育」というもの。さらにこれか

らのグローバル化に向かった「国際化」の問題、さらに出口であります「キャリア教育」、すなわち1年から4年次まで継続的なキャリア教育をしていかなければならないであろうということ。これらの上で、重点的に「グローバル人財（人という財産）の育成」を進めていこうと考えたわけでございます。若干詳しくご紹介させていただきます。

まず、「哲学教育」でございしますが、これは基盤教育科目において「哲学・思想」の科目というのを、後でご紹介いたしますが、つくりました。そこで、各学部・学科で独自の哲学科目を設定するようということで、カリキュラムに反映させてございます。例えば法学ですと「法哲学」、経済であれば「経済哲学」。私は理工学部でございしますが、そこでは「エンジニアのための哲学」というものを新たにつくりまして、それを基盤教育、共通科目の中に加えるということをしたわけでございます。

なるべく対話型、あるいはオープンな授業を実施してほしいとお願いしております。これは、もともと学祖が言っている、「哲学は思想の錬磨である」ということ、頭の中でより深く考えるということを学生たちにも日々実践してもらいたいという意図から、こういう科目を設置したわけです。

また、先ほど立教大学さんのご報告にもございましたように、自校教育ということも中に入れております。

次に、「国際化・グローバル教育」です。昨今の時代に即した人材を育てるという意味で、特に語学教育が中心になるわけでございますが、さらに英語トラックで卒業できるような、そういう体制も少しずつ今整えているところでございます。

さらに、「キャリア教育」でございしますが、先ほど申し上げましたように、1年生から4年生まで連続的な形で行っています。基盤教育科目の中に枠を設定し、また、専門教育の中にも、くさび的にインターンシップでありますとか、ボランティアでありますとか、そういう科目を入れながら実践していくというような形で進めているところでございます。

さて、そこで本学の基盤教育改革についてでございますけれども、先ほど来お話がございましたように、時期的には中教審の答申「新しい時代における教養教育のあり方について」（2002）がございましたし、さらに新しいところでは、日本学術会議の提言「21世紀の教養と教養教育」（2010）も出ているわけでございます。そういう中で、私どもとしては、時代をさかのぼりますと、いわゆる般教（パンキョー）と言われていた一般教養科目、これはいわば2年間で完結するようなプログラムを実施しておりましたけれども、それが時代とともに、リベラルアーツという言葉が随分広がってまいりまして、1年生から4年生の期間を通して、いわゆる一般教養科目を学んでいくという時代が続いたわけでございます。

そういうことで、昨今、先ほど来申し上げているようなグローバル化時代における教養教育というものの見直しが必要であろうということが叫ばれている中で、従来の私どもの教養科目にどのような課題があるかということを考えてみますと、実は昔からの教養教育

は一種の不可侵領域という形が非常に長く続いて来ているわけでございます。これは、ご承知のように教養科目と専門科目という、2つのカテゴリーの中で、お互いにタッチしないということに来ていたわけです。

しかも、科目としては、カリキュラムの中では、学問分野別・科目内容別分類ということが進んできています。もちろん、大綱化の後ですから、結果としては専門の中に分属されたわけでございますけれども、依然としてカリキュラムの中ではこういうことが進んでいたわけございまして、一種のカリキュラムの硬直化というものを招いてきたわけでございます。

運営主体も、先ほどの立教大学さんとは異なるかと思いますが、全学的にこういう教育について議論・検討する委員会として、「全学カリキュラム委員会」というのがございました。けれども、そこで主体的に運営していくというよりは、むしろ、例えば自然科学であれば「自然科学委員会」でありますとか、そういう委員会組織の中で、それぞれカリキュラムをつくっていくというような形が続いてきたわけでございます。

そうしますと、やはり学生が学ぶ目的に沿った体系ではありませんので、必ずしも十分な学修成果というものを上げることができないという状況が以前からあったわけでございます。こういう反省に立ちまして、実は2013年度から、基盤教育再構築のためのワーキンググループを全学カリキュラム委員会の中につくりまして、検討してまいったわけでございます。全学カリキュラム委員会というのは、どこの大学でも大体同じかもしれませんが、例年四年に一度カリキュラム改定をいたしますので、それにあわせて開催されるというような委員会でございます。その中にワーキンググループをつくって、開催の頻度を上げて検討を進め、基盤教育をつくり直していこうということで進めてきたわけでございます。そうして、2016年4月から、「東洋大学スタンダード」という新しいカリキュラムが稼働していると、そういう歴史的な背景がございます。

この「東洋大学スタンダード」は、7つの目標と5つの領域という形に、この議論の中で整えてあります。

まず「新基盤教育カリキュラム・7つの目標」ですが、1つは、「哲学することを重んじ、自ら考え、判断し、行動する」。これは本学の教育理念に沿ったことでございます。それから、これも教育理念に沿ったところでございますが、「知・徳・体の力を伸ばし、生命と自然を尊重する」。あるいは、「学問を通して、論理的思考と生涯教育への礎を身につける」。「現代社会における諸課題を解決するための発想力・創造性を養う」。あるいは、「自他の伝統と文化を相互に尊重するとともに、自らの個性を育む」、「21世紀のグローバル社会に貢献できる国際人・地球市民となる」。そして、「総合的視野に立ち、他の分野の人々とも協働できるリーダーをめざす」。そういう人材を育てて行きたいと、こういう7つの目標を掲げたわけでございます。

続いて、新基盤教育カリキュラムを構築するに当たりまして、5つの領域を設けました。1つは「哲学・思想領域」、それから「学問の基礎」、さらに「国際人の形成」、「キャリア・

市民形成」、それから「総合・学際」、そういう5つの領域を設定しまして、そこにそれぞれの科目を入れるということをしたわけでございます。

この図(スライド11)は、その全体像を図示したものです。中心に「学問の基礎」というのを置きましたけれども、そこに先ほどお話いたしました3つの柱、「哲学・思想」「国際人の形成」「キャリア・市民形成」をくくりまして、さらにその全体を「総合・学際」という形で囲むような、そういう図式のもとに、体系的なカリキュラム構成というものを考えて、今年度から進めているわけでございます。

これと並行して、教育の質を向上させるための幾つかの施策も同時に進めて、これを反映させています。

1つ目は、当然ながらカリキュラムでございしますが、まず3つのポリシーというものが重要だということが言われてございしますので、私どももその検証を進めて、各学部・学科において3つのポリシーを設定していただきました。

そして、それをもとにカリキュラムマップをつくる作業を、これは全学11学部、それぞれ担当の教職員が集まって作成し、お互いにそれを評価し合うということをやってまいりました。そういう試みを通して、例えば「ああ、俺たちの学科はこういうところが無駄だな」とか、あるいは「新しい分野を取り入れないといけないな」とか、さまざまな気付きを得ることができる。ほんとうに相互のコミュニケーションということで、いい効果が出てきたかなと思っております。

さらに、同時並行的に科目ナンバリングをつけることもいたしておりますので、新しいカリキュラムの中では、全てシラバスとともにナンバリングも付すという状況でございませう。

2つ目はシラバスです。なるべく充実したシラバスをつくっていかうということで、これも全学カリキュラム委員会の中でいろいろ検討いたしまして、平成25年度から、各学科の専任教員によるシラバスの総点検のピアレビューをするようにいたしました。

さらに、平成27年度からはシラバスの点検用ルーブリックをつくりまして、一応標準的なルーブリックはこの程度の要件は満たすようにしてください、あるいはもっとそれ以上の目標に向かってシラバスを充実させてくださいという形でガイドラインをつくってございませう。

3つ目に、学習支援についても、先ほど他大学からもそれぞれ学習時間のお話がございましたけれども、学習時間をなるべく多くするための工夫を進めており、そのために4キャンパスでの学習支援の仕組みも設けてございませう。システムとしても、ToyoNet-ACEの拡充や入学前e-Learningの実施などの取り組みを行っているわけでございませう。

4つ目として、教員の質向上に関する取り組みとしては、従来からFD、あるいはSDというのは、当然ながら活動を続けているわけでございませうが、教員の活動評価につきましても、昨年度から教育・研究・社会貢献・学内業務、4つの分野について自己点検をしていただくように、28年度から本格導入をしているところでございませう。

なお、以上の4つのうち、学習支援について少し詳しいことを申し上げますと、従来、本学の学習支援室で行ってきた取り組みとしては、どちらかといいますとリメディアル教育が中心になっていたわけでございます。けれども、ちょっと言い方は語弊がございますけれども、非常にレベルの高い、意欲のある学生のための学習支援というものと、ちょっと学力が落ちている学生のための学習支援というものと、やはりその両面を考えていかなければならないわけでございます。つまり、リメディアルのみならず、多様な学生に対応する体制が必要となります。

そういうことで、今年の4月から、従来の学習支援室を「ラーニングサポートセンター」という名前に変更いたしました、4キャンパスでそうした取り組みを実施していこうということになりました。

ここまでお話ししてきたような取り組みを、東洋大学全学カリキュラム委員会で推進しているわけですが、ここに示しますのが、その委員会の全体的な構成図でございます（スライド15）。ちょっと見づらくて大変恐縮でございますが、これがいわば今やっている中での私どもの課題と捉えていただければよろしいかなと思います。全学11学部の学部長先生、それから、いわゆる教務担当の先生方、それから関連のある部門の委員長の先生方かなり大がかりな委員会組織になりますが、委員長は副学長、つまり現在は私が務めておりますが、このような体制で運営をしているということでございます。

現在、同委員会のもとに、4つの小委員会をつくっております。カリキュラム体系化小委員会、アセスメント検討小委員会、基盤教育高度化小委員会、それから語学カリキュラム小委員会ですが、いわばこの4つを、私どもとしては現時点での重要なテーマだと認識していると申し上げて良いかと思えます。

カリキュラム体系化小委員会では、先ほどお話ししました3つのポリシーの問題でありますとか、クォーター制の問題などを取り扱っています。アセスメント検討小委員会では、GPAの課題などを検討していただいております。

さらに今日のテーマであります基盤教育についても、4キャンパス間でどのように連携していくか、あるいはキャリア教育をどうやっていくかということの検討小委員会をつくっているわけです。語学についても、やはり、これからの語学教育をどのようにしていくかということは非常に大きな喫緊の課題でございますので、そのようなことを今、私どもとしては、全学的に進めているところでございます。

最後に「次なるステージへむけて」と題して、今後の展望についてお話をさせていただきたいと思えます。

まず、これはスティーブ・ジョブズが言っている言葉でございますが、新しいものをつくること、これはイノベーションと言っているいいかもしれませんが、イノベーションというのは、テクノロジーと、それからリベラルアーツとの交差点の中で生まれるんだと、彼はそう言っているわけでございます。そういう意味で、このリベラルアーツということが、意味はいろいろあるかと思いますが、テクノロジーとともに非常に大事であるというのが、

我々が持っております1つの認識であります。

それから、これは、私どもの大学に「学生FDチーム」というチームがございますが、そこが主催している「東洋授業への声コンクール」というのがございます。その中で、昨年度に最優秀賞をとった学生の歌を紹介させていただきます。「自分の視野を広げた講義」というテーマの中で、「大学の 講義を受けて 思い知る 無知な自分と 無数の知識」。私も気に入っているのでございますけれども、こういう歌に触れますと、やはりそこに、学生と教員との間で起こっている事柄の在りようとお申しますか、あるいは教育という営みの、一種の「姿」というのが見えるような気がして来るわけです。

このようなところからも、大学教育における、フェース・トゥー・フェースでやっていく教育というものの大切さということ、改めて認識したというところでございます。

また、グローバル化時代における大学の教育というのはどういうふうにやっていったらいいんだろうかということについても、私ども、今でも検討しているわけでございます。いわゆる一般教育・共通基礎教育というものに加えて、中には専門の教養というものもありますし、それから専門教育があります。これを体系化してどう結びつけていくかということ、やはり私どもは考えていかなければならないということでございます。

そして、当然ながら、「教育の質」を社会に保証していくための仕組みというものをどうつくっていくかということについても、これから考えていかなければなりません。私どもとしては、やはりまだできていないと感じているのが、今日、山田先生のお話にもございましたような、学習成果の指標の可視化でございます。今後の大きな課題だと考えております。

最後に、教員と職員との協力、すなわち教職協同ということについては、当然従来から言われていたわけでございますが、私どもとしては、最大のステークホルダーである学生というものを、どううまく巻き込みながら教育改善をしていくかということ。それが、これから私どもにとって非常に大きなテーマになっていくのではないかなと、そのように思っているところでございます。

非常にざっと、全体的なお話を申し上げましたけれども、東洋大学の現状について少しお話をさせていただきました。ありがとうございました。(拍手)



2016年4月、新基礎教育カリキュラム「東洋大学スタンダード」始動。

2016年4月よりスタートする新基礎教育カリキュラムは、従来の「基礎教育」から「新基礎教育」へと名称変更し、その内容を大幅に刷新し、学生の学びをより充実させることに取り組んでいます。

2016年4月よりスタートする新基礎教育カリキュラムは、従来の「基礎教育」から「新基礎教育」へと名称変更し、その内容を大幅に刷新し、学生の学びをより充実させることに取り組んでいます。

9

東洋大学スタンダード

東洋大学スタンダードは、東洋大学が定める共通の基礎教育カリキュラムです。

新基礎教育カリキュラムの目的

1. 東洋大学に入学した学生が、入学後1年間で共通の基礎教育を修得し、2年次以降の専攻科目の学習に備えること。2. 東洋大学の特色である「国際性」を育み、グローバル社会に対応できる人材を育成すること。3. 東洋大学の特色である「国際性」を育み、グローバル社会に対応できる人材を育成すること。

新基礎教育カリキュラムの構成

1. 外国語 2. 英語 3. 情報 4. 体育 5. 芸術

10

新基礎教育カリキュラム5つの目標と内容

グローバル人材としての社会貢献者育成 (7つの目標を達成)

1. 外国語能力の向上  
2. 英語能力の向上  
3. 情報能力の向上  
4. 体育能力の向上  
5. 芸術能力の向上

6. 国際理解能力の向上  
7. 社会貢献能力の向上

11

教育の質向上のための対応

(1) 教育の質向上のための対応

- ・ 2つの選り分けの保証
- ・ 学びの質向上のための対応
- ・ 国際性・グローバル社会対応のための対応
- ・ 社会貢献能力の向上のための対応

12

2016年度の教育

1. 卒業25周年を機に、各学部の専任教員によるグローバル化の推進を推進  
卒業25周年「グローバル化推進ワーキンググループ」の発足  
卒業25周年「グローバル化推進ワーキンググループ」の発足

2. 学習支援

- 学習支援の推進、学習支援の推進、学習支援の推進
- 4キャンパスすべてに学習支援センターを設置
- 授業改善、導入促進、授業改善等の推進
- Toyohit-ACGの活用、入学後1-Yearの活用
- 授業改善の推進、学習、授業の推進

3. 教育の質向上

- 授業改善の推進
- 授業改善の推進
- 授業改善の推進

13

本学における学習支援

- ・ 4キャンパスに学習支援室の整備
- ・ 多様な学生に対応「1対1教育の新でほびい」
- ・ (4月より「ラーニングサポートセンター」に名称変更)
- ・ 図書館におけるラーニング・コモンスの整備
- ・ Toyohit-ACGにおける「manaba」の活用
- ・ 教職支援室の整備

14

全学カリキュラム委員会

全学カリキュラム委員会の設置目的は、全学共通の基礎教育カリキュラムの整備と推進です。

委員会の構成

委員長：学長  
委員：各学部長、各学部学部長、各学部長、各学部長

委員会の役割

1. 全学共通の基礎教育カリキュラムの整備と推進  
2. 全学共通の基礎教育カリキュラムの整備と推進

15

次なるステージへむけて

- ・ インターンシップ/インターンシップ/インターンシップ
- ・ 社会の現場での実践教育 (企業現場への実習・インターンシップ)
- ・ 大学と連携を促して、社会と連携を促して、社会と連携を促して
- ・ グローバル化に向けた取り組みの推進 (国際化推進)
- ・ 国際化推進 (国際化推進) + 専門教育 + 専門教育
- ・ 国際化推進 (国際化推進) + 専門教育 + 専門教育
- ・ 教育の質向上を推進する
- ・ 2年次の英語、英語の推進、TOEFLの活用、英語の推進
- ・ 英語の推進 (英語の推進)、英語の推進 (英語の推進)

16